

憩いの場×防災拠点 新小岩駅北口広場の提案



コウジン
洪水のための
土のうステーション

*洪水とは洪水のように溢れ還る人々を指す。

01 問題：閑散とした駅前広場と、土のうステーションの低い認知度

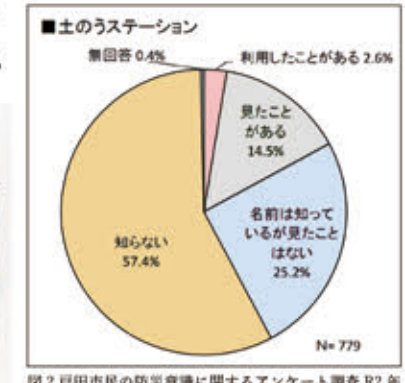
a. 新小岩駅北口広場

新小岩駅は東京の葛飾区に位置するJR東日本の駅。駅の北口は商業施設が集まる南口に対して住宅街が多く、比較的新しいエリアであり広場の設計が少し異なっている。北口広場は、将来的な発展を見越して広めに設計されているが、現状ではそのスペースが活用しきれていない。休める日陰も、座れる椅子もないため、多くの人が漠然と広い空間を素通りしている。



b. 土のうステーション

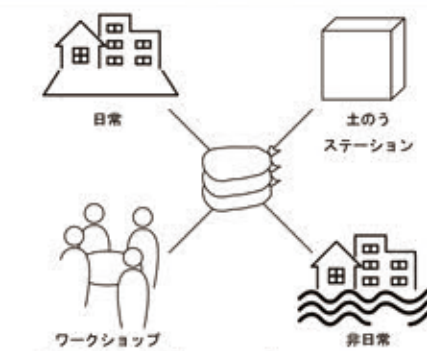
荒川に近接している葛飾区では水害対策のため、街の各所（全25箇所）に自由に、土のうを持ち出せる土のうステーションが設置されている。しかし設置数の割に土のうステーションの認知度は低く、分散しすぎていることが分かる。また、設置環境も悪く、周辺の風景を壊している。



02 明るく開かれた土のうステーションのハブを新小岩駅前広場に作る

c. 主旨と目的

土のうを用いた駅前広場を設計する。これにより、閑散とした現状に人々の滞留する場を設け、水害に対応する防災拠点としての機能を持たせる。また、ワークショップを通じた住民の交流をも目指す。この広場は人々の集うハブであり、分散した土のうステーションに目を向けるきっかけとなるだろう。



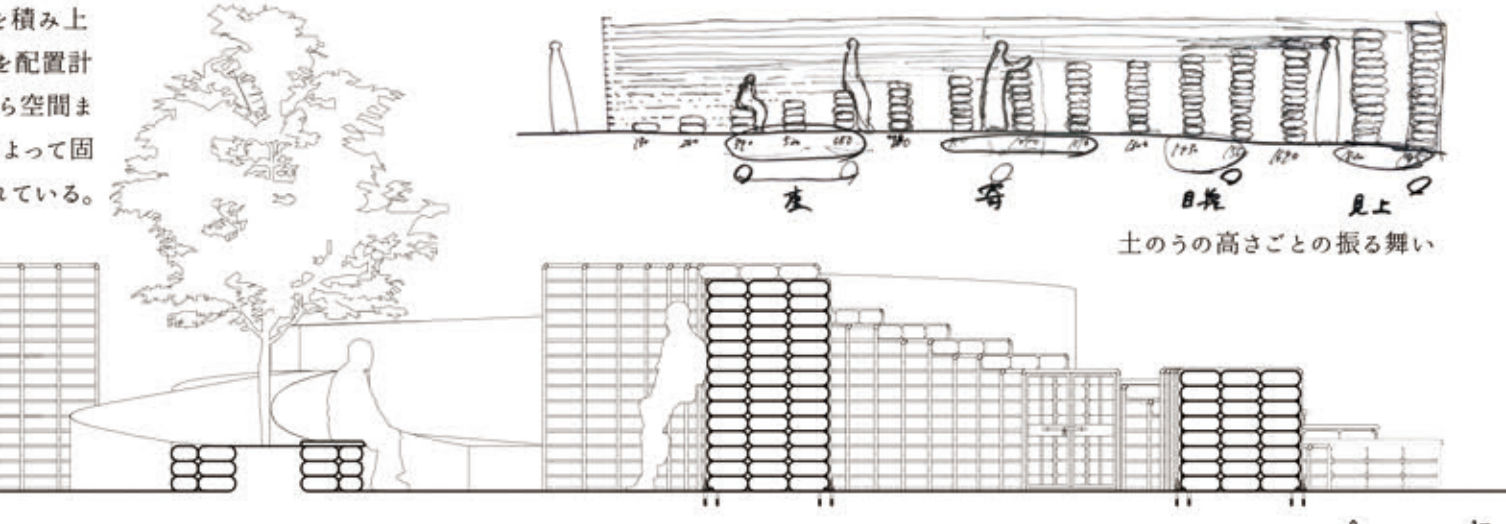
d. 土のうを使うということ

土のうという一般に馴染みが薄く、災害時に使われる程度の印象だろう。一方で、これを建材として捉えようか。これほど安価かつ単純で扱いやすく、何より可変性・柔軟性に富んだ素材はないだろう。土のうという非日常が日常に溶け込んだ時、そこには、人々の交流する豊かさ、災害に対応する強さを持ったまちが立ち現れてくるのである。

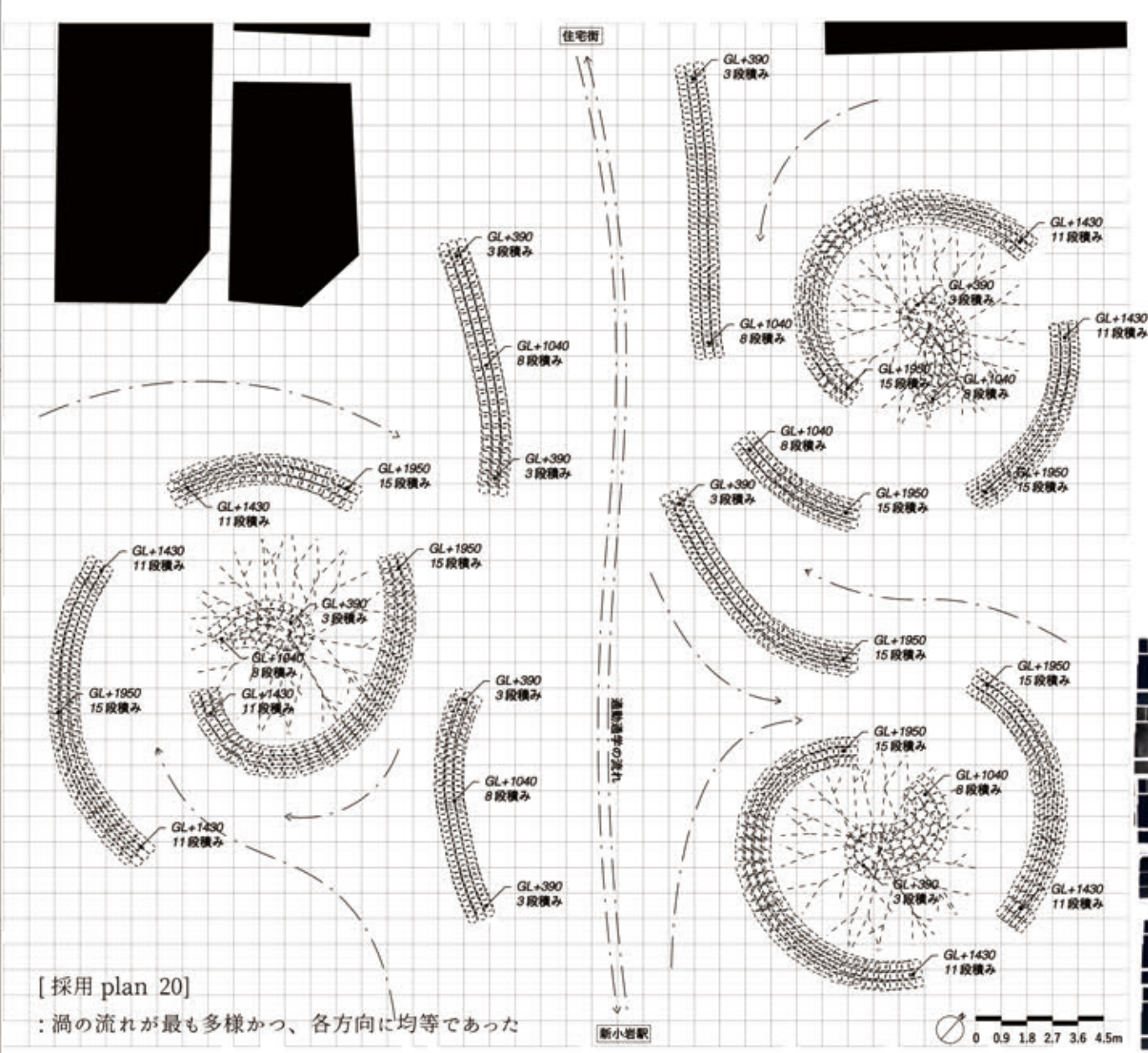


03 憩いの場であり、緊急時に土のうを解放するためのユニット設計

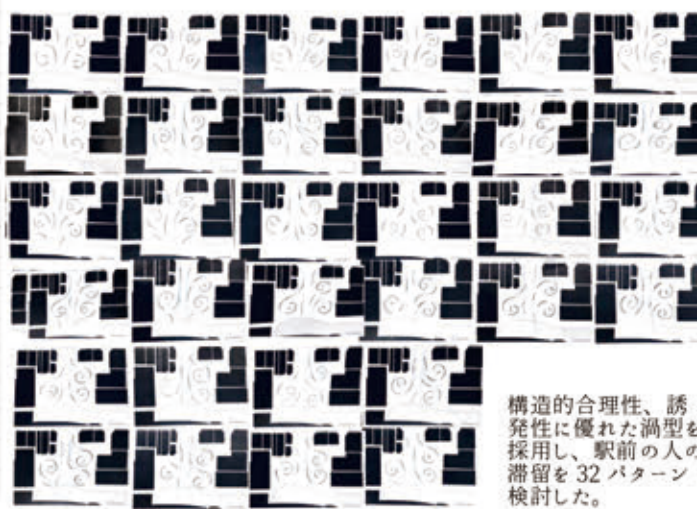
土のう1つを130mmの高さと設定し、これを積み上げ、主に4種類のグループを設定する。これらを配置計画と結びつけ、幅広い使い方のできる仕器から空間までを作り上げている。土のうは鉄筋フレームによって固定され、フレーム同士は横材によって接続されている。



04 土のうが生み出す人の流動性と滞留性



*model 流動性と滞留性
 土のうを水ではなく人を制御するストラクチャーに



05 メンテナンスを介した循環型のまちづくり→movieへ